

心理形容詞における経験者記述と対象記述の交換

嶋 田 裕 司

Psychological Adjectives: An Alternation between Experiencer and Object Descriptions

Hiroshi SHIMADA

1. 目的

心の状態に関する形容詞は、その状態を経験する人について記述する場合とその状態を引き起こす対象について記述する場合がある。形容詞によって、どちらか一方を記述するように決まっているのが普通であるが、中にはどちらも許されるものがある。つまり、ある形容詞がその形態を変えずに、経験者について述べることも対象について述べることもできる場合がある。小論の目的は、現代英語の心理形容詞のうち、このように両方の記述が可能な類の特徴を調べ、そこで起きている現象を捕らえることである。

これは、多義的な語の複数の意義を統一的に理解する試みの1つである。後述する経験者記述と対象記述の相違は、辞書類においては意義の相違として扱われている。一般の辞典では、1つの語彙項目に複数の意義が存在することを認め、それをある順序で配列することによって、多義的な語の全体的意味を表現している。この複数の語義は、互いに何等かの関係で結ばれており、その関係が配列に反映されていることが多い。また、ある意味分野の幾つかの語の意味を比べると、1つの語彙項目中の2つの語義の関係とよく似た関係が、別の語彙項目の語義の間にも存在することが繰り返し見られることがある。そのような場合、それぞれの関係を、語の内部に限定された別々のものと見なすのではなく、ある共通の性質が各項目に現れたものと見なすことは自然だと思われる。すなわち、話者に内在する辞書の中に規則性が存在することを認めて、その規則が各語彙項目に作用して、ある語義から別の語義を派生させると考えることができる。ここでは、心理形容詞に繰り返し見られる多義性に注目し、それを説明するための語彙的意味規則を提示する。

2. 意味と記述対象の分離

辞典で語の意味を調べると、1つの見出し語の中に1つの語義しかないこともあるが、使用頻度の高い語の場合には、幾つもの語義が番号を付されて並んでいることが多い。形容詞の場合にも、語の意味が複数の語義に分けて記されていることがある。例えば、『小学館プログレッシブ英和中辞典』では、見出し語 *curious* の下に4つの語義がある。そのうち最初の2つの中から、定義の一部分とその用例を挙げると、次のようになる。

(1) *curious*

- 1 (よい意味で) 知りたい、知りたがっている；(悪い意味で) せんさく好きな：
a ~ child 知識欲旺盛な子供 / a ~ look 好奇に満ちた顔つき / be ~ about other people's business 他人のことにやたらと興味を持つ。
- 2 好奇心をそそる： a ~ sight 不思議な光景。

語の意味に関する限り、実用的な辞書の目的は、意味を分析して読者に理解しやすい形式で提示す

ることにあるので、この記述は十分に目的を果たしていることになる。語義の1は、人に関して述べる用法であり、＜ある人が何かを知りたがっている＞あるいは、＜好奇心が強い＞ということであろう。それに対して、語義の2は、物事に関して述べる用法であり、＜あるものが人の好奇心をそそる＞ということであろう。しかし、curious という1つの語に、なぜこの2つの語義があるのか、この2つの間にはどのような関係があるのかという疑問を考え始めると、細分化した語義を列挙するだけでは、語の意味を十分に理解したことにはならないことに気がつく。

curious における2つの意義を統一的に理解するために、人の心の状態に関する形容詞に共通する意味要素がどのようなものか考えてみよう。このような形容詞の意味を記述するためには、意味上の役割を少なくとも2つ設定する必要があると思われる。1つは、問題の形容詞が表す心理状態になっている人物である。ここでは、その人を経験者(experiencer)と呼ぶことにする。a curious child の例では、子供が、その形容詞の表す心理の経験者ということになる。もう1つは、その感情が向けられている物事であり、これを対象(object)と呼ぶことにする。John is curious about other people's business の例では、2つの役割が表現されていて、John が経験者であり、other people's business が対象である。さらに、経験者と対象から区別できる第3の役割を a curious look (好奇心に満ちた顔つき) という例に見出だすことができる。この場合、顔つきは経験者そのものではなく、経験者の心の状態を表現するものであり、これを区別して表現者(revealer)と呼ぶことにする。表現者は、典型的には経験者の体の一部や表情、言葉、態度である。このように、1つの形容詞をめぐって少なくとも3つの役割を認めることができる。¹

つぎに、意味役割と形容詞の意味そのものを分離して考えてみよう。意味上の3つの役割を受け入れた上で、形容詞 curious の意味が1つしかないと仮定する。その意味とは、おおよそ、＜物事に人が好奇心を寄せている＞ということである。すると、上で2つの語義として別々に記されていたものを、1つの意味の2つの現れ方と見なすことができるようになる。つまり、curious は、1つの意味を持ちながら、複数の意味役割に関して記述することができるのである。1の語義の例 a curious child と a curious look は、それぞれこの形容詞が経験者と表現者について記述する場合となる。2の語義の例 a curious sight は、同じ意味の形容詞が対象について記述する場合ということになる。今後、経験者、表現者、対象について記述することを、それぞれ経験者記述、表現者記述、対象記述と言うことがある。²

意味と意味役割の記述を分けることによって、複数の意義を1つの意味として統一できる形容詞は、curious に限られない。つぎに示すように、fearful, hopeful もその例である。³

(2) fearful

- a. I am fearful of failure. SPEJ (経験者について)
- b. cast fearful glances at a large dog SRHE (表現者について)
- c. a fearful storm SPEJ (対象について)

(3) hopeful

- a. We are hopeful of his success. SPEJ (経験者について)
- b. hopeful words SRHE (表現者について)
- c. The weather looks hopeful. SPEJ (対象について)

しかし、心理に関係する形容詞であれば、どれでも3種類の役割について記述ができるというわけではない。むしろ、上のような例は少なく、経験者と表現者に関して記述する形容詞は、対象について記述できず、また、対象について記述する語は、他の役割については記述できないことが普通

である。例えば、angry と anxious は、経験者と表現者の記述に限られる。horrible は、その逆で、対象の記述しか許されない。

(4) angry

- | | |
|-----------------------------------|-----------|
| a. I was angry at the delay. LDCE | (経験者について) |
| b. angry criticism/words LDCE | (表現者について) |
| c. *the angry delay | (対象について) |

(5) anxious

- | | |
|--|-----------|
| a. I am anxious about his health. KDEC | (経験者について) |
| b. a nervously anxious look KDEC | (表現者について) |
| c. *his anxious health | (対象について) |

(6) horrible

- | | |
|--|-----------|
| a. *I am horrible of/about the accident. | (経験者について) |
| b. *a horrible look (恐れを表した表情) | (表現者について) |
| c. a horrible accident SPEJ | (対象について) |

上の例から判断する限り、表現者記述は経験者記述に依存していると思われる。言い換えると、(1)から(6)の例では、経験者記述ができる形容詞は全て表現者記述ができる。しかし、horrible の例が示すように、対象記述ができる語の中には表現者記述ができないものがある。したがって、ここではこの観察を一般化して、表現者について記述することは、経験者記述が可能な語にのみ許されると仮定する。以下では経験者と対象の対立にのみ注目して考察する。

3. 両義的形容詞の類

3. 1. 問題の明確化

前節では、心理に関する形容詞の意味役割として経験者、表現者、対象の3つを認めた。そのうちのどれを記述するかは、形容詞によって異なっている。curious, fearful, hopeful はその3つを記述することができるのに対して、angry, anxious, horrible はそれら全てについて記述することはできない。上で述べたように表現者の記述は経験者の記述に依存すると考えて、経験者と対象についてのみ心理形容詞を分類すると、angry のような経験者記述の類と、horrible のような対象記述の類と、curious のような両方の記述を許す類に分かれる。

目的は、curious のような両方の記述が可能な類の特徴を調べることにある。経験者と対象のどちらか一方のみを記述する例については、両方可可能な語と比較する範囲で触れるに止め、類の所属を決める要因については、未解決のままにする。その要因の1つの可能性としては、類への所属が恣意的に決まっていて、互いに何の共通性もないということがありうる。別の可能性としては、ある種の意味が類の決定に関与しているということが考えられる。例えば、怒りに関する形容詞は経験者記述になり (angry, furious, resentful)、恐れに関する形容詞は対象記述になることが普通である (frightful, dreadful, horrible)、ということが言えるかもしれない。類の決定要因が明らかな下位類としては、以下で直ぐに見るように、特定の接尾辞を持つ場合がある。いずれにせよ、ここでは一方の記述に限られる語は、両方の記述を許す語と比較するためにのみ言及する。話の中心は curious のような両方の記述ができる類にある。⁴

意味による類の規定に取り掛かる前に、接尾辞とこの問題の関係について考えよう。接尾辞が両義的類の決定に直接関係することはない。経験者記述と対象記述の区別に関与しているものがある

けれども、接尾辞が全てを支配しているわけではない。確かに、心理動詞から派生した形容詞の場合に、接尾辞によって類が決まることはよく知られている。interested/interesting, amused/amusing, surprised/surprising など、-ed 形（過去分詞）は経験者記述になり、-ing 形（現在分詞）は対象記述になる。

- (7) a. I am very interested in the book.
b. The book is very interesting to me.

また、接尾辞-ous と-able または-ible が対立して、X-ous は経験者記述に、X-able, X-ible は対象記述になる例がある。

- (8) a. I'm very envious of your new job. LDCE
b. a nice man, whose job was not as enviable as it appeared to be.... CCEL
c. credulous/credible, contemptuous/contemptible,
covetous/covetable, desirous/desirable

ところが、接尾辞によっては決まらない場合もある。-able, -ible の付く語は対象記述に限られるであろうが、-ous の付く語で経験者記述に限られないものがある。上で見た curious がその例にあたる。また、hideous は、a hideous crime（いまわしい犯罪）のように対象記述に限定される。さらに、-ful で終わる形容詞の場合は、語幹が類を決めるのであって、-ful が決めるのではない。例えば、scornful, resentful は経験者記述に、frightful, dreadful は対象記述になる。次のような例はあるが、その経験者を対象に、あるいは対象を経験者に入れ替えたような例は見られない。

- (9) a. He was scornful of my efforts. KDEC
b. He was resentful at the way he was treated.... CCEL
c. The battlefield was a frightful scene. LDCE
d. a dreadful nightmare OALD

要するに、心理に関わる形容詞は、接尾辞が-ed であれば経験者記述、-ing, -able, -ible であれば対象記述になるが、-ous と-ful は、それだけでは形容詞の類を決定できない。特に、どちらの記述も可能な類は、接尾辞によって特徴づけることができない。

3. 2. 可能性の認識

さて、経験者も対象も記述できる形容詞の類を意味の面から規定することを試みよう。手始めに、ともに-ful のつく形容詞 fearful と hopeful を、それぞれの類義語と比較することによって、その意味的特徴を捕らえることにする。この2語には、ある事態が生じる可能性を経験者が認識するという共通の意味が含まれていることが明らかになる。

最初に、fearful を恐れに関する類義語と比較しよう。一般に恐れに関する形容詞は対象記述に限られている。(10a)のような例はあるが(10b)のような例は見られない。⁵ところがfearful は例外的に両方の記述が可能であり、(11b)のような例も許される。

- (10) a. a frightful/dreadful/horrible/terrible accident

- b. *I was frightful/dreadful of the accident.
- (11) a. a fearful storm LDCE
- b. He was fearful of her anger. LDCE

この fearful の特殊性を接尾辞に帰すことはできない。対象記述に限られる frightful, dreadful も同じ接尾辞-ful を持っているからである。horrible, terrible が対象記述に限られることは、-ible によって扱うことができる。(8)で示したように、一般に-ible の付く形容詞はそのように限られているからである。ただし、その説明では他の接尾辞を持つ経験者記述の形容詞(例えば、*horrous, *terrous) がなぜ存在しないのかという深い疑問には答えられない。

ここでは、恐れに関する形容詞の中で fearful のみが特殊であることを意味の面から考えるために、比較しやすい対応する名詞について考える。fearful, frightful, dreadful については、語幹の名詞 fear, fright, dread を比べ、horrible, terrible については、horror, terror が対応すると考える。名詞 fear は、(12)に示すように have を動詞とする文に生じる点では、他の名詞と変わりがない。これらの文は、いずれも経験者が対象を恐れていることを表している。ただし、fright には、of 句によって対象を表現する文は見られない。

- (12) a. I have a great fear of fire. LDCE
- b. I got/had a great fright. KDEC
- c. She has a dread of hospitals. OALD
- d. I have an absolute horror of spiders. KDEC
- e. I have a terror of insects. LDCE

名詞 fear が他の名詞と異なるのは、that 節を従えることができる点である。(13)のような例はあるが、文中の fear を fright, dread, horror, terror に代えると不自然な文になる。⁶

- (13) a. I was suddenly seized with the fear that they would drown. LDCE
- b. My fear that he might get lost proved to be unfounded. LDCE
- c. We spoke in whispers for fear (that) we might wake the baby. OALD

これらの例で fear に伴う that 節が表現する内容は、法助動詞 would, might によって明示されているように、ある事態が生じる可能性である。fear は、対象そのものを恐れる意味のみならず、事態が生じる可能性を恐れる意味を持っていると言える。このような that 節が fear に限られることは、その意味が fear を他の名詞から区別する特徴であることを示している。fear には、経験者が対象を恐れるという単純な意味ではなく、経験者が対象に関して何等かの事態が生じる可能性を認識してその実現を恐れるという意味がある。

さて、形容詞 fearful に戻ろう。(9)で見たように接尾辞-ful が記述の類について中立的であり、この接尾辞を持つ形容詞が名詞の意味をそのまま受け継ぐと仮定すると、frightful, dreadful は対象そのものを恐れていることを表し、fearful はそれに加えて、事態が生じる可能性を恐れていることも表すということになる。事実、可能性を恐れる意味が、名詞 fear から形容詞 fearful にそのまま受け継がれていることを(14)の例が示している。fearful も that 節を従えることができ、その法助動詞 would は未来あるいは可能性を表している。

- (14) We were fearful that she would be angry. LDCE

したがって、恐れに関する形容詞は、対象記述になるのが普通であるが、事態が生じる可能性を恐れる意味を持つ場合には経験者記述になると考えると、fearful が例外的であることに一応の理由を与えることができる。

つぎに、hopeful を類義語と比較する。願望を表す類義語 desirous, anxious, eager は経験者記述に限られるのに対して、hopeful は、fearful と同様に、経験者と対象の両方を記述することができる。(15d)のような例だけがみつからない。

- (15) a. We are desirous of peace. OALD
 b. We are really anxious for peace. KDEC
 c. He is eager for success. LDCE
 d. *desirous/anxious/eager peace
 (16) a. I am hopeful about the future. OALD⁷
 b. The future does not seem very hopeful. OALD

hopeful は、that 節をとる点で、desirous, anxious, eager と同じであるが、節中の法助動詞の選択が異なっている。(17)に示すように、願望の形容詞においては、that 節の中に should を伴うか、動詞が仮定法現在形になる。一方、hopeful は、(18)に示すように、この位置に will, shall, can をとる。

- (17) a. The chairman is desirous that the sales campaign be initiated immediately. KDEC
 b. They were anxious that aid should be sent promptly. OALD
 c. I am eager that they should win. LDCE
 (18) a. I am hopeful that he will succeed. KDEC
 b. I feel hopeful that we shall succeed. OALD
 c. ...Palfrey was still hopeful that they could be persuaded to accept his notion of paying wages. Brown F28 0370

hopeful の that 節中に未来や可能性を表す法助動詞が存在することは、それが単純に経験者の願望を表すのではなく、ある事態が生じる可能性があることを認識し、その事態が生じることを望むという二重の意味を担っていることを示している。この意味が、hopeful を他の願望の形容詞から区別していると思われる。

さらに、対応する名詞を比べると、hope は願望を表す名詞 desire に似ている点と可能性を表す possibility に似ている点があることが明らかになる。(19)と(20)を比較しよう。願望の desire は to 不定詞をとるのに対して、possibility は of+動名詞をとる。また、desire は have の目的語になるのに対して、possibility は there 構文に生じる。(21)のように、hope は、desire と同様に have の目的語になることも、possibility と同様に there 構文に生じることもできる。ただし、その補部は possibility と同じく of+動名詞である。

- (19) a. I have a strong desire to escape from the city.... KDEC
 b. *There is a strong desire (for me) to escape from the city.

- (20) a. *I have a strong possibility of winning the game.
 b. There is a strong possibility of my winning the game.
- (21) a. I have a slight hope of winning the game/*to win the game.
 b. There is a slight hope of my winning the game.

接尾辞-ful のある形容詞は、語幹名詞の意味をそのまま受け継ぐと仮定すると、名詞 hope のこのような振舞いは、形容詞 hopeful が願望と可能性の意味を合わせ持つという見方を支持するものと思われる。

3. 3. 不確実性の認識

さて、fearful と hopeful に起こっていることについて、共通点を求めてみよう。語の意味について共通する部分は、経験者が対象に関してある事態が生じる可能性を認識する点である。相違は、fearful ではその事態の実現を恐れ、hopeful ではそれを望むことにある。経験者記述と対象記述の交換現象の場合、語の意味は1つであり、経験者が統語的に実現するか否かによって、交換が起きると考え、この現象が生じる領域と変化について、次のような仮定をしてみよう。すなわち、形容詞の意味形式が、＜経験者が対象についてある可能性を認識して、ある心の状態になる＞という場合に、経験者が不特定の人として解釈されることが許され、そのとき形容詞が対象記述になると考える。(22a)と(22b)は経験者と対象に具体的な項目が入った場合であり、(22c)は経験者が不特定と解釈され、それが統語的に実現しない場合ということになる。⁸

- (22) a. I am hopeful about the future.
 b. I am hopeful that he will succeed.
 c. The future is hopeful.

しかし、この現象が生じる領域を＜可能性を認識する＞という意味によって規定すると狭すぎることを、doubtful, dubious が示していると思われる。(23a-b)と(24a-b)はこれらの語においても同じ交換が起きていることを示している。(23c)と(24c)については、経験者が whether 節が表すことの実現の可能性を認識して、その実現が疑わしいと思っていると解釈できるので、問題はないかもしれない。しかし、(23d)と(24d)については、従属節に疑問詞 what が存在するので、これらの節は事態の生じる可能性を表すのではなく、対象についての不確実性を表していると思なすほうが適切であろう。つまり、ここでは、事態の実現の可能性が問題になっているのではなく、事態を構成する項目が確定していないことを what が示しているのである。

- (23) doubtful
- a. We are doubtful of the patient's recovery. KDEC
 - b. What he says is altogether doubtful. KDEC
 - c. I am doubtful whether she will agree to this. LDCE
 - d. I feel doubtful what I ought to do. KDEC
- (24) dubious
- a. I'm still dubious about that plan. LDCE
 - b. The results of this policy will remain dubious for some time. OALD
 - c. I'm dubious (as to) whether this strategy will work or not. KDEC

- d. We were all dubious (about) what we should say. KDEC

doubtful における事態の構成要素の不確定性と、hopeful における事態の実現の可能性の両方を包含するものとして対象の不確実性という概念を設定し、この現象を次のように一般化する。

(25) 心理形容詞の対象記述化

a. 形容詞の意味

経験者が対象について不確実性を認識して、ある心の状態になる。

b. 経験者の不特定化

形容詞は、この意味を持つとき、経験者が不特定であるという解釈を受けることができる。

このように形容詞の意味形式を定めると、疑いや確信を表す suspicious, uncertain, unsure, certain, sure, clear もこの交換が起きる類に含まれることになり、事実(26)–(31)のような例がある。(a)が経験者記述、(b)が対象記述である。(c-d)は疑問節を従える例で、これらの形容詞に対象の不確実性を認識する意味が含まれていることを表している。ただし、suspicious には節を従える例がみつからない。

(26) suspicious

- a. I'm suspicious of his intentions. KDEC
b. There were suspicious circumstances about his death.... CCEL

(27) uncertain

- a. I'm uncertain of his intentions. LDCE
b. The outcome is still uncertain. OALD
c. I was uncertain whether to continue. KDEC
d. I am uncertain how he did it. KDEC

(28) unsure

- a. I'm unsure of the facts. OALD
b. ...his memory was curiously unsure. W3
c. We are still unsure whether he is alive or not. KDEC
d. We are unsure (about) who was to blame. OALD

(29) certain

- a. She saw me: I'm certain of that. OALD
b. There is no certain cure for this disease. OALD
c. I'm not certain whether he deserves promotion. DEWG
d. I'm not certain (of) what she wants. OALD
e. I'm certain (that) she saw me. OALD

(30) sure

- a. You may be sure of one thing—he is completely honest. KDEC
b. One thing is sure; he can't have gone far. LDCE
c. ...he was not sure whether it was sound or light-headedness pressing in his ears.
Brown N22 1020

- d. I'm not sure when I saw her last. OALD
- e. She felt sure that she had done the right thing. OALD

(31) clear

- a. She seems quite clear about her plans. LDCE
- b. The instructions on the packet weren't very clear. LDCE
- c. I'm still not quite clear how it works. LDCE
- d. Were you clear that you couldn't loan her any more money? KDEC

(25a)の意味条件によって交換現象から除外される例を見よう。(32)のような対象の認識に関する意味を持つ aware, conscious, ignorant, forgetful は、対象を認識するか否かを問題にするけれども、その不確実性を認識する意味は持たない。したがって、これらは(25a)の意味条件に合わず、対象記述の *Her intentions are aware. *The sharp pain was conscious.などは生じない。

- (32) a. I am aware of her intentions. KDEC
- b. He was conscious of a sharp pain. KDEC
- c. She is ignorant of basic facts in the case. KDEC
- d. He is very forgetful of things. KDEC

また、(33)の感情についての意味を持つ angry, jealous, fond, glad も、対象について何かを思っているという意味はあるけれども、その不確実性を認識する意味はない。したがって、これらも *The delay was angry. *Tom's success was jealous.のような対象記述にはならない。

- (33) a. I was angry at the delay. LDCE
- b. He was jealous of Tom's success. OALD
- c. She is very fond of salty things. KDEC
- d. I'm glad about his new job. LDCE

上では、経験者記述にしかならない例を挙げたが、逆に対象記述にしかならない例を見よう。これらは、(25)の派生の方向が正しいことを示唆していると思われる。対象の不確実性に関する形容詞でありながら、経験者記述にならない形容詞としては possible, likely, probable がある。これらは、(34a)のように可能性を表す that 節を従えることができる。しかし、(34b)のような経験者主語にはならず、(34c)のような to Mary などの句もとらない。このことは、問題の交換現象が、経験者記述の不特定化によって対象記述が生じるとする仮説(25)に一致している。もし、派生が逆方向で、対象記述の意味が基本にあり、それに経験者の役割を付与して経験者記述が派生するのであれば、possible などが経験者記述にならないことを説明することが困難になる。

- (34) a. It is possible that John will come.
- b. *Mary is possible that John will come.
- c. *It is possible to Mary that John will come.

同様に、明白さを表す形容詞 apparant, evident, obvious も、経験者記述にはならない。ただし、ここでは(35c)の to me のような句が許される。これらも、経験者の意味役割を形容詞の意味自体に

付与する方向でこの現象が起こるのではないことを示していると思われる。

- (35) a. It was evident that she was drunk.
 b. *I am evident that she was drunk.
 c. It was evident to me that she was drunk. KDEC

さて、冒頭で取り上げた curious に戻ると、これは(25a)の意味条件に当てはまる例であることが明らかになる。(36a-b)のように交換が生じ、しかも、(36c)では対象として which で始まる疑問節があり、意味条件に合うことが推測できる。さらに、(36d-e)のように know, see などの知識を得ることを表す動詞と疑問節が後続することも、curious に対象の不確実性を認識する意味があることを示している。

- (36) curious
 a. Man is naturally curious about the universe. DEWG
 b. His behavior seemed curious.... DEWG
 c. ...I was curious as to just which part of such a simple question was giving him trouble.
 PF p.73
 d. We were curious to know where she'd gone. LDCE
 e. She was curious to see what would happen. CCEL

このような交換現象が起きるのはなぜであろうか。この問題は、交換に課された意味条件に関わっている。経験者がある対象を見て、それに不確実性があることを認識するとき、その不確実性は経験者自身が認識するからそこにあるのか、それとも、対象自体に存在する性質なのかが問題となる。たとえば、doubtful の場合、経験者が対象に不確定な要因があることを認識した上で疑っていると思えることもできれば、対象そのものが不確実性を帯びているために疑わしいと思えることもできる。どちらの概念化が適切なのだろうか。英語では、このような場合、形容詞がどちらに解釈されてもよいことを交換を規定する規則(25)が許しているのである。(25)の規則には、このような認識上の両義性に一致するように記述の対象を変更する機能がある。

それに対して、このような認識過程を含む2段階の意味がない語の場合には、交換は生じない。例えば、怒り(anger)は経験者の中で直接生じ、外に出ていくものとして概念化される。また、強い恐怖(terror)は外部から経験者の元へやって来る。このことは、KDEC にある次のような表現として実現する。

- (37) a. If you don't let it out, anger builds up inside you....
 b. His anger burst out.
 (38) a. This terror haunted him day and night.
 b. Terror seized him.

このようなとらえ方に一致して、形容詞 angry は経験者記述に、terrible は対象記述になる。しかも、概念化が一方に固定されているので、記述の交換を許す規則も存在しない。

最後に規則(25)によっては扱えない例を見よう。基本的な心理形容詞である sad, happy は経験者記述も対象記述もできる。ただし、sad の方が対象記述の場合の制限が緩やかである。

- (39) a. The children are sad.... DEWG
 b. The movie is sad. DEWG
 c. I am/It is sad that James refuses to speak. Quirk et. al. p.626
- (40) a. Are you happy in your work? OALD
 b. That wasn't a very happy choice of words. OALD
 c. I am/*It is happy that James refuses to speak. Quirk et. al. p.626

この交換を(25)によって扱うことには無理がある。sad, happy は対象の不確実性を認識する意味を持たないからである。したがって、(25)を維持するならば、今まで見てきた交換現象とは異なるものとして、これらの扱いを考える必要がある。すなわち、不確実性の認識をめぐる記述の対象の交換は、形容詞に生じる交換現象の一部分ということである。

4. まとめ

curious, hopeful, doubtful などに見られる記述対象の交換現象は、形容詞の意味によって範囲が規定される。この交換が生じるのは、＜経験者が対象について不確実性を認識して、ある心の状態になる＞という形式の意味を持つ形容詞である。そのような形容詞においては、経験者が不特定であるという解釈が許され、そのとき対象記述になる。この経験者記述の形容詞に対象記述を許す規則は、理由もなく存在するのではなく、不確実性をめぐる2つの概念化と関わっている。ある心理的経験を、経験者が対象の不確実性を認識し、その上で何かを思うこととして捕らえることも、対象自体に不確実性が存在し、それが人に何かを思わせることとして捕らえることもできる。交換規則には、この2つの認識を表現上も可能にする機能がある。あるいは、2つの概念化に合わせてこの規則があると言うよりは、概念化と規則を融合した形式で述べ直すべきかもしれない。

謝辞

英語の話者として協力してくださいました Michael A. O'Sullivan さんと、文献の存在を教えてくださいました戸所宏之さんに感謝いたします。また、この話題にいつも快く耳を傾けてくださいました篠木れい子さんと新井小枝子さんにお礼を申し上げます。

注

- この他にも「時」という意味役割を設定する必要があることを、次の例の a proud day, anxious moments, happy hours が示している。
 It was a proud day for her parents when she qualified as a doctor. LDCE
 We had a few anxious moments before landing safely. OALD
 We spent many happy hours playing on the beach.... CCEL
 これらは、転移修飾語 (transferred epithet) と呼ばれる用法の一部であろう。これについては、小川 (1954: 65-71)、安井他 (1976: 176-9) を参照。
- 形容詞がある意味役割について記述するということは、形容詞の限定用法・叙述用法とは別の概念である。a curious child の例では、限定用法の curious が経験者である child について記述し、John is curious about other people's business の例では、叙述用法の形容詞が経験者である John について記述している。
- 用例の後の略号は、その出典を示す。

- 4 考察の対象は現代英語に限定する。したがって、資料として用いた辞典は現代英語を対象にしたもののみとし、歴史的記述のある OED は除外した。この現象の歴史には、Abbott (1905), Poutsma (1914), フランツ (1968) が触れている。
- 5 afraid は例外的に経験者記述になる。しかし、古くは frighten を意味する affray の過去分詞なので、過去分詞は経験者記述になるという一般化に従っている。
- 6 ただし、事実の観察をさらに詳しく行う必要がある。名詞 dread が that 節を従える例が CCEL にあるからである。
 ...his dread that the child would be infected with the disease. CCEL
 しかし、他の辞典や資料にこのような例は見られないので今のところ例外と考えておく。これは、dread が fear に似ているために生じたのかもしれない。両者とも動詞は名詞と同音で、I fear/dread the dog. のように経験者主語である。他の名詞は、frighten, horrify, terrify として使役化の接尾辞を伴って、経験者が目的語になる。
- 7 この用例は原典では I am...ではなく、be...である。
- 8 経験者と対象の両方の意味役割が表現されれば、経験者が主語に、対象が前置詞の目的語に結び付けられる。経験者が表現されないと、対象が主語に結び付けられる。このような意味役割と統語上の位置の関係は一般的原則(linking rules)によって決まると仮定する。この理論については、Baker (1988), Grimshaw (1990), Jackendoff (1990), Pesetsky (1995) を参照。

参考文献

- CCEL=Sinclair, J. 1987. *Collins COBUILD English Language Dictionary*. Collins.
- DEWG=小西友七 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』(*A Dictionary of English Word Grammar on Adjectives and Adverbs.*) 研究社.
- KDEC=市川繁治郎 1995. 『新編英和活用大辞典』(*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations.*) 研究社.
- LDCE=Summers, D. 1991. *Longman Dictionary of Contemporary English*. New Edition. Longman.
- OALD=Cowie, A. P. 1989. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Fourth Edition. Oxford University Press.
- OED=Simpson J. A. and E. S. C. Weiner 1989. *The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Oxford University Press.
- SPEJ=小西友七・安井稔・國廣哲彌 1987. 『小学館プログレッシブ英和中辞典』第2版 (*Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary.*) 小学館.
- SRHE=『小学館ランダムハウス英和大辞典』(*Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary.*) 小学館.
- W3=Gove, P.B. 1966. *Webster's Third New International Dictionary*. G. & C. Merriam Company.
- Brown=the Brown Corpus.
- PF=Sakamoto, N. and R. Naotsuka. 1982. *Polite Fictions*. 金星堂.
- Abbott, E. A. 1905. *A Shakespearian Grammar*. The Macmillan Company.
- Baker, M. C. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.
- Grimshaw, J. 1990. *Argument Structure*. The MIT Press.

- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. The MIT Press.
- Pesetsky, D. 1995. *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. The MIT Press.
- Poutsma, H. 1914. *A Grammar of Late Modern English. Part II The Parts of Speech*. P. Noordhoff.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 小川佐太郎 1954.『形容詞』 英文法シリーズ 8. 研究社.
- ヴィルヘルム・フランツ 1968.『シェークスピアの英語 ―詩と散文―』 齋藤静・山口秀夫・太田朗共訳. 篠崎書林. (Wilhelm Franz 1939. *Die Sprache Shakespears in Vers und Prosa*. Max Niemeyer Verlag.)
- 安井稔・秋山怜・中村捷 1976.『形容詞』 現代の英文法 第7巻. 研究社.